

.....

1. 演題 「モード化する社会」

2. ご講演概要

右肩上がりの時代はひとびとの欲望が定型化する。高度成長期における「三種の神器」のように、高度消費社会における「DCブランド現象」のように。そして建築や音楽、芸術や思想のように消費財でないもの、つまりそれじたいが流行を超えているはずのものにも、「モード」が浸透してくる。

これにたいして低成長期、あるいは停滞期の社会ではひとびとの欲望は逆にばらけてくる……。このことが意味するものを、「モード」という現象を切り口に考えてみる。

3. プロフィール：鷲田 清一（わしだ きよかず）

哲学者・大阪大学総長

昭和24年京都市生まれ。京都大学文学部卒業。昭和52年京都大学大学院文学研究科（哲学）博士課程修了。関西大学文学部教授、大阪大学大学院文学研究科教授（哲学）、同研究科長、大阪大学理事・副学長を経て、平成19年8月より現職。日本倫理学会会長、アートミーツケア学会会長。

これまで哲学の視点から、身体、他者、顔、規範、所有、モード、国家などを論じるとともに、美術・ファッション批評をおこなってきたが、近年は哲学の思考を社会の問題発生現場（医療・介護現場や教育現場）につなげる「臨床哲学」のプロジェクトに取り組んでいる。

主な著書に、

『「聴く」ことの手』(阪急コミュニケーションズ、桑原武夫学芸賞)、

『モードの迷宮』(ちくま学芸文庫、サントリー学芸賞)、

『メルロ＝ポンティ』(講談社)、

『じぶん・この不思議な存在』(講談社現代新書)、

『悲鳴をあげる身体』(PHP新書)、

『老いの空白』(弘文堂)、

『「待つ」ということ』(角川学芸出版) などがある。